

令和 5 年度
福島県 集落自主活動に係る伴走支援事業

小野町谷津作行政区業務実施報告書

獨協大学こまち「大地の泉」つながるプロジェクト

指導教員 経済学部国際環境経済学科 米山 昌幸

[目次]	ページ
1. はじめに.....	1
2. 小野町谷津作行政区の概要と課題.....	2
2.1. 小野町・谷津作行政区の位置と概観	
2.2. 小野町の人口動態と谷津作地区の人口	
2.3. 小野町の気候	
3. 今年度の活動実績報告と評価.....	6
3.1. ミーティングの開催	
3.2. 現地活動	
3.2.1. 和久稻荷神社・八雲神社の視察	
3.2.2. 源泉（大地の泉）と温泉神社の視察	
3.2.3. 湯沢温泉の視察	
3.2.4. 夏井地区（諏訪神社、夏井駅）の視察	
3.2.5. おのまち健康まつり 2023 への参加	
3.2.6. 現地の方との懇談会	
3.2.7. 八雲神社例大祭（子ども神輿）への参加	
3.2.8. 現地視察の評価と今後の展望	
3.3. 獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2023～Winter～”における 福島県復興支援物産展の開催	
3.4. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会	
4. 活動を通して見えてきた課題.....	17
5. 次年度の活動計画～サポート事業への申請に向けて～.....	18
5.1. 源泉を活用した温泉神社のお祭りの復活	
5.2. 福島県復興支援物産展の継続開催	
5.3. 温泉マルシェの開催	
6. おわりに.....	19

1. はじめに

2019 年度福島県「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に、始めて応募した獨協大学地域活性化プロジェクト米山チーム Part 2 は、1 年目に担当となった小野谷津作行政区の現地調査を実施し対象地域の実態把握と課題の抽出を行った。しかし 2020 年度は新型コロナウイルスの影響で活動が滞りその間にメンバーも大幅に入れ替わったため、2021 年度は学び直しの期間と捉え、オンラインを中心に活動を行った。2022 年度は新型コロナウイルス感染症の規制緩和に伴い、現チーム初の現地での活動を行った。実際に現地を訪れ、現地の実態調査と課題を確認した。4 年目を迎えた今年度は、「集落自主活動にかかる伴走支援事業」に申請するにあたり、チーム名を「米山チーム Part 2」から「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」に変更をし、活動を展開してきた。現地の実態調査やオンラインでの活動から得た情報や課題により、本年度初頭に今後、源泉を活用して温泉神社のお祭りを復活させるという方針を設定した。そこで、今年度は決定した今後の方針に沿う形で、これからの活動に向けて活動してきた。

「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」は坂口諒(代表：国際環境経済学科 3 年)、福永侑真(副代表：経済学科 4 年)、岡田遥高(同 4 年)、石川万優深(ドイツ語学科 4 年)、鈴木翔大(同 3 年)、水野雄清(英語学科 3 年)、梅橋萌(フランス語学科 2 年)、船上由紀(同 2 年)、高橋那奈(同 2 年)、石野陽人(総合政策学科 1 年)の 6 学科 10 名からなるチームである。

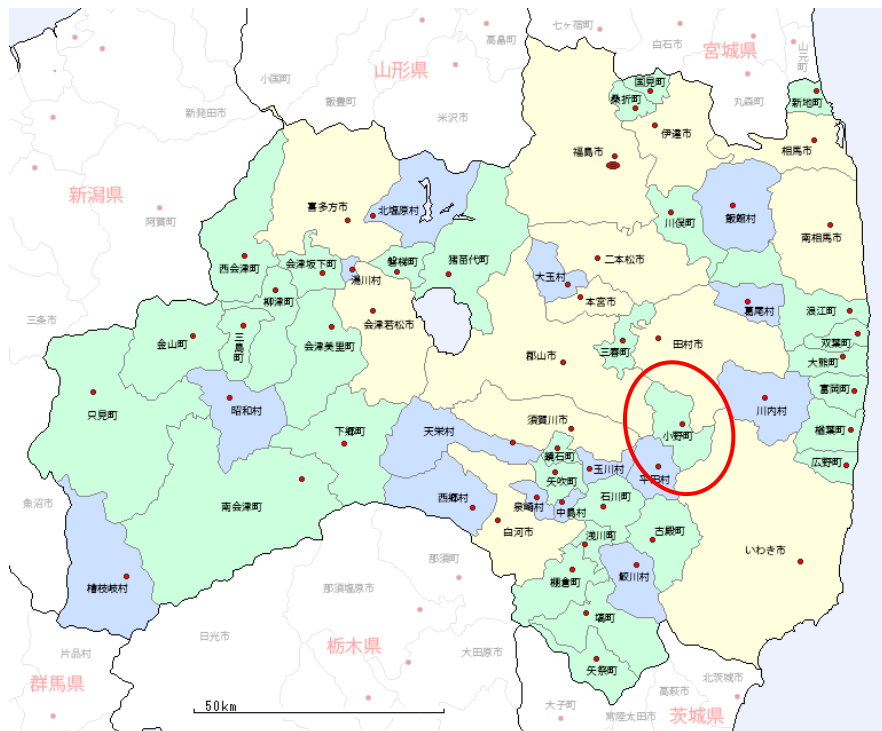
「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」は 2 度の現地活動を行うほか、大学内で物産展を開催した。1 度目の現地活動は 2023 年 9 月 9 日・10 日に行った。視察には小野町観光協会会長の二瓶晃一氏、谷津作行政区住民の斎藤直美氏、小野町地域おこし協力隊の阿井由加子氏に同行していただいた。2 日間を通して、和久稻荷神社をはじめとする観光資源、源泉（大地の泉）や温泉神社の視察を行った。その際、同行していただいた二瓶晃一氏に、源泉の詳細の説明を受けた。その後、谷津作行政区の住民や青年団の方との懇談会を開催し、八雲神社例大祭についての話し合いを行った。また、2023 年 10 月 13 日・14 日には 2 回目の現地活動を行い、八雲神社の例大祭（子ども神輿）に参加した。八雲神社例大祭では、神輿の装飾、祭礼の参加、神輿の補助、神輿の片付けを行った。しばらくぶりの例大祭開催であったため、地元住民からの関心も高く、学生メンバーもより多くの地元住民と交流を図ることができた。また、現地活動以外にも、昨年度から継続して学内にて「福島県復興支援物産展」を開催し、小野町の PR 活動も行った。

本報告書において、「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」の小野町谷津作行政区の概要と課題設定について報告する。第 2 節では小野町谷津作行政区における概要と課題設定を述べる。第 3 節で今年度の活動実績を報告するとともに評価を行う。そして、第 4 節では活動を通して見えてきた課題を述べて、第 5 節で次年度のサポート事業申請に向けた活動計画について述べる。

2. 小野町谷津作行政地区の概要

小野町は福島県中通りの東部に位置し、阿武隈山系の中心地に属し、田村郡の南部に位置している。北に田村市、南にいわき市、西に郡山市・平田村と隣接する(図表1参照)。小野町には27の行政区があり、谷津作行政区は旧小野新町に位置している(図表2参照)。

図表 1. 福島県小野町の位置



[出典]福島県の地図(市町村区分図)(<https://uub.jp/map/fukushima/>)

図表 2 . 小野町の行政区分と谷津作行政区の位置



[出典]「都市と田園環境の共生等のあり方について」(事例発表)(小野町地域整備課)(以下の URL 参照)<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/29929.pdf>

2.1. 小野町・谷津作行政区の概観

小野町の沿革は、1889(明治 22)年に、飯豊村、小野新町村、夏井村が誕生し、1896(明治 29)年には小野新町村が小野新町になり、1955(昭和 30)年には、小野新町・飯豊町・夏井村が合併して、小野町が誕生した。図表 2 をみると、谷津作行政区は旧小野新町村に位置している。

2024(令和 6 年)1 月 1 日時点で、小野町の人口は 8,740 人(男性 4,367 人、女性 4,373 人)、世帯数は 3378 世帯である¹。学校生徒数は 2023(令和 5)年時点で幼保連携型認定こども園の入園者数が 151 人、小学校生徒数が 389 人、中学校生徒数が 281 人となっている²。

小野町は郡山市といわき市のちょうど中間に位置しており、車でのアクセスは磐越自動車道で郡山 JCT から 39km(約 30 分)、いわき JCT から 37km(約 25 分)、電車のアクセスは JR 磐越東線で郡山駅から 50 分余り、いわき駅から 45 分弱の距離にある。このことから住民の生活圏も両方に掛かっている。

2.2. 小野町の人口動態と谷津作行政区の人口

図表 3 は、1965(昭和 40)年以降 2015(平成 27)年までの小野町の人口と世帯数の推移を示したものである。1965 年には小野町の人口は 16,595 人であったが、1980(昭和 55)年頃までは急速に減少して、その後 1995(平成 7)年頃までは緩やかに低下して 1995 年には 13,306 人となり、その後再び減少を加速させて 2015 年には 10,475 人となっている。その後、2020(令和 2)年には 9,482 人と 1 万人を切っている。小野町における世帯数は、1965(昭和 40)年から 1990(平成 2)年までなだらかな増加傾向にあったが、1990(平成 2)年以降は 2005(平成 17)年まで増減を繰り返す、2005(平成 17)年以降は 2020(令和 2)年に至るまで世帯数の減少が続き、2020(令和 2)年には 3,372 世帯にまで減少している。

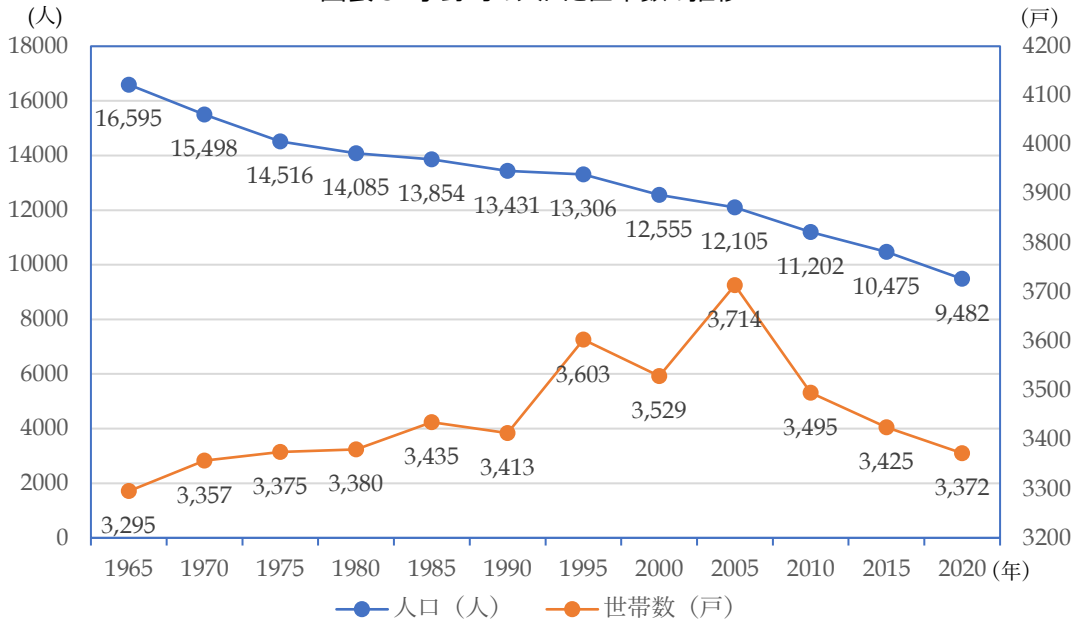
図表 4 は、1980 年から 2020 年までの小野町の年齢 3 区分別の人口の推移を表したものである。1980 年に比べて 2020 年には年少人口(0~14 歳)は約 7 割減少しているのに対し、老年人口(65 歳~)は 2 倍以上に増加しており、生産年齢人口(15~64 歳)は 2 分の 1 強まで減少している。特に、小野町の高齢化率に着目すると、1980 年の 10.8%から 2020 年には、35.9%に上昇しており、高齢化の傾向が顕著である。

¹ 福島県企画調整部統計課(2024)「福島県の推計人口(福島県現住人口調査月報)令和 6 年 1 月 1 日現在」(以下の URL)、16 頁を参照。

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/611406.pdf>

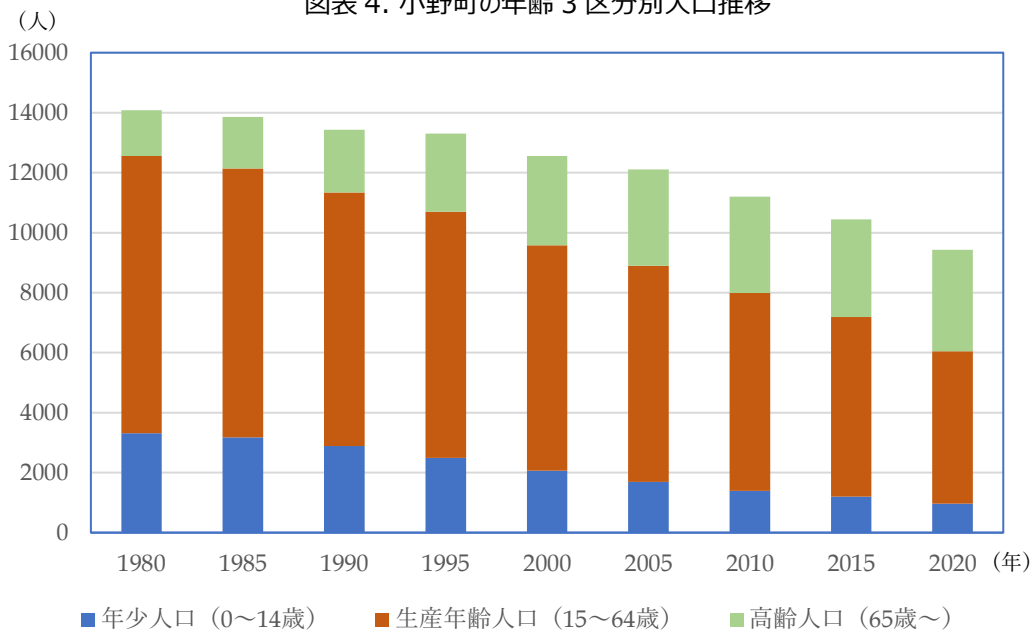
² 「政府統計の総合窓口(e-stat)」、調査項目を調べる—学校基本調査(文部科学省)「学校調査表(幼保連携型認定子ども園)」、「学校調査表(小学校)」、「学校調査表(中学校)」(以下の URL)を参照。<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400001&tstat=000001011528>

図表 3. 小野町の人口と世帯数の推移



[出典]小野町ホームページ 統計情報(以下の URL を参照)を基に作成。[原資料]国勢調査による。
(<https://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/3/toukei.html>)

図表 4. 小野町の年齢 3 区分別人口推移



[出典]「政府統計の総合窓口(e-stat)」、調査項目を調べる一都道府県・市区町村のすがた(社会・人口統計体系)、市区町村データを基に作成。
(<https://www.e-stat.go.jp/regional-statistics/ssdsvie/municipality>)

2.3. 小野町の気候

小野町は内陸性の気候で、山々に囲まれていることから山岳気候を呈する準高冷地であ

る³。この冷涼な気候や昼夜の温度差といった特性を活かして、水稻を主として、野菜、畜産、きのこ、葉タバコ等の農作物を生産している。気温が低く昼間と朝夕の寒暖差が大きいため、野菜がおいしく育つと言われている。図表 5 を見ると、降水量は 1,000mm から 1,500mm 程度で、日本全体の平均との大きな乖離は見られないが、日平均気温は 10℃前後と比較的寒冷である。また、図表 6 を見ると、冬の平均気温は 0℃を下回る一方、夏は平均気温が 30℃に迫るなど、1 年を通して気温の差が大きいこともわかる。

図表 5. 小野町の気候

年	降水量 合計 (mm)	気温			風向 平均風速 (m/s)	日照時間 (h)
		平均				
		日平均 (℃)	日最高 (℃)	日最低 (℃)		
1980	1132.0	9.5	14.2	4.9	1.2	2024.2
1985	1152.0	10.3	15.2	5.7	1.2	2099.8
1990	1508.0	11.3	16.3	6.7	1.3	1501.1
1995	1302.0	10.2	15.0	5.9	1.3	1483.1
2000	1321.0	11.0	15.9	6.6	1.1	1498.4
2005	1025.0	10.4	15.6	5.8	1.1	1554.2
2010	1492.5	11.2	16.8	6.5	1.1	1589.0
2015	1093.0	11.4	16.9	6.6	1.2	1719.9
2020	1091.5	11.7	17.0	7.2	1.2	1542.4
2023	1022.5	12.3	18.6	7.2	1.2	2202.7

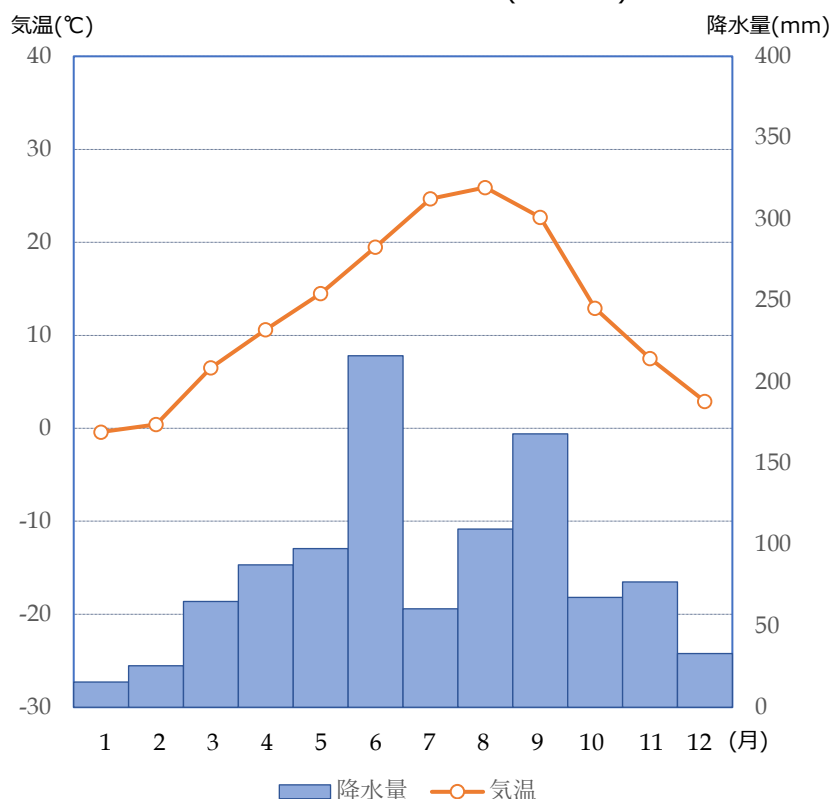
[出典]気象庁「過去の気象データ検索 年ごとの値」(以下の URL)を基に作成。

(https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/annually_a.php?prec_no=36&block_no=0304&year=2024&month=&day=&view=)

³ 小野町公式ウェブサイト「町の概要」「気候」(以下の URL)を参照。

(<http://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/2/gaiyou.html>)

図表 6. 小野新町の雨温図(2023 年)



[出典]気象庁「過去の気象データ検索 月ごとの値」(以下の URL)を基に作成。

(https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/monthly_a1.php?prec_no=36&block_no=0304&year=2023&month=&day=&view=p1)

3. 今年度の活動実績報告と評価

今年度の「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」はさまざまな活動を行い、住民との交流を行ったほか、大学周辺での事業への認知の向上を図った。以下でそれぞれの活動について紹介していく。

3.1. ミーティングの開催

今年度は昨年に引き続き、現地の方々を交えて Zoom を通したオンラインでのミーティングを実施した。コロナ禍が明けたことを受け、対面でのミーティングも行い、現地視察の準備や物産展の打ち合わせなども行った。以下で今年度行ってきたそれぞれのミーティング内容について紹介していく。

図表 7. 2023 年度活動報告：ミーティング記録

日付	場所	内容	参加者
2023 年 7 月 23 日	Zoom	・今年度以降の活動についての話し合い →源泉活用と温泉神社の祭りをゼロベースで行うことを決定	現地の方：3 名 学生：4 名

2023年 10月5日	学内	<ul style="list-style-type: none"> ・10/13(金)、14(土)の現地調査の予定確認と出欠確認 ・現地調査に係る必要書類の記入 	学生：6名
2023年 10月29日	Zoom	<ul style="list-style-type: none"> ・10/13(金)、14(土)の現地調査の振り返り ・Earth Week Dokkyo のイベントの話し合い ・物産展開催に係るスケジュール確認 ・福島県側に提出するアンケートの内容の確認 	現地の方：2名 学生：4名
2023年 11月26日	Zoom	<ul style="list-style-type: none"> ・物産展で販売できる商品候補の確認 ・物産展開催までにやることの確認 	現地の方：3名 学生：2名
2023年 11月30日	学内	<ul style="list-style-type: none"> ・物産展で販売する商品の確認 ・物産展当日の流れとシフトの確認 ・商品のポップ作成の担当決め 	学生：6名
2024年 1月25日	Zoom	<ul style="list-style-type: none"> ・報告会の日程の確認 ・来年度以降に行う、温泉神社の祭りの内容のアイデア出し 	現地の方：2名 学生：4名

9月の現地視察を受け、10月から本格的に始動した。今年度のミーティングを振り返ると、7月のミーティングで定まった今後の方針をもとに、予定通り進めることができたことについては評価できる一方、ミーティングの参加者のばらつきや連絡不足、スムーズなミーティングができていなかったことが課題として挙げられる。これらのことから、ミーティングの日程を不定期ではなく、年初にミーティングの日程をあらかじめ設定しておく必要があると考える。あらかじめ日程を設定しておくことで、参加者が増加し、メンバー間のコミュニケーション不足を解消することが期待される。

3.2. 現地活動

今年度は9月9日(土)、10日(日)と10月13日(金)、14日(土)のそれぞれ1泊2日で現地入りし、現地の観光資源や源泉等の視察を通して小野町について学ぶとともに、行政区のお祭りに参加することで、より一層地域に対する理解を深めることができた。実際に訪れた場所の概要や感じたことをいくつかの項目に分けて、活動の様子とともに紹介する。

図表 8. 行程表

時程	行程
9月9日(土) 8:00~12:07	高速バス あぶくま号 (247分) バスタ新宿発～郡山駅前着
12:10~13:10	郡山駅周辺にて昼食
13:24~14:14	JR 磐越東線(いわき行) 郡山駅発～小野新町駅着
14:20~17:00	小野新町駅にて現地スタッフと合流 源泉や温泉神社の視察、和久稻荷神社・八雲神社の視察
17:10~18:30	現地の方の車にて宿泊先へ移動
19:00~21:00	「こまちの湯」にて夕食

	谷津作地区研修センターにて地元の方との懇談会
9月10日(日)	
7:30～8:30	宿にて朝食
9:30～10:30	小野町内の湯沢温泉の視察
10:30～11:00	夏井地区の視察（諏訪神社・夏井駅）
11:30～12:30	現地にて昼食
12:30～14:00	おのまち健康まつり 2023 への参加
14:36～20:01	東方文化堂の視察 JR 磐越東線(郡山行) 小野新町駅発～郡山駅着 高速バス あぶくま号 (251分) 郡山駅前発～バスタ新宿着

3.2.1. 和久稻荷神社・八雲神社の視察

町内の伝統資源である和久稻荷神社、八雲神社を視察した。実際に足を運び、散策することで町内の文化的な側面について理解することができた。

八雲神社は10月に行われる子ども神輿の開催場所である。視察により会場がどのような場所なのかについて確認し、開催へのイメージを膨らませることができた。

写真 1. 八雲神社



写真 2. 和久稻荷神社



3.2.2. 源泉（大地の泉）と温泉神社の視察

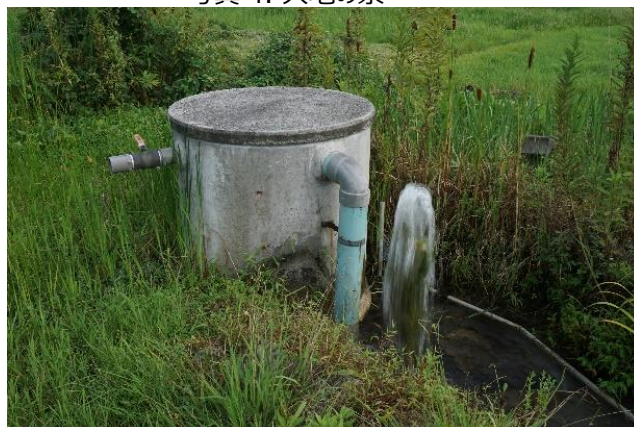
源泉(大地の泉)と道路を挟んだ小高い丘に位置する祠のような温泉神社の2つを視察した。源泉である「大地の泉」は観光スポットではないものの大きな地域の資源であるといえるだろう。この土地にはかつて地域住民の交流拠点ともなっていた旅館小町温泉が2008(平成20)年頃まで存在していた。昔、地域住民は顔パスで入ることができ夏場は畑で作業した人々が汗を洗い流したりしていたそうである。一方、冬場になると宿泊客が多かったとのことである。地域住民は無料で入ることができていた分、旅館の手伝いをしていそうで湯を沸かすのに必要な薪を拾いに行ったり、薪を割ったりしていたと住民の方がおっしゃっていた。

小町温泉は地域住民に支えられながら営業していた。しかし廃業となった後、震災が起こり源泉は影響を受け止まったが1か月後再び湧き出ることとなり、これは周辺の源泉よりもかなり早く湧き出た。奇跡的に復活した源泉を残そうと本事業のカウンターパートでもある小野町観光協会会長の二瓶晃一氏が「大地の泉」と名付けた。実際に訪れてみたところかなりぬかるんでおり、いまの建築法ではこのままの土地であれば建物を建てられないとのことであった。また土地の権利の問題もあり活用段階にいくまでにさまざまな障壁があることを再確認した。

写真 3. 大地の泉の説明を聞くメンバーの様子



写真 4. 大地の泉



温泉神社は、源泉(大地の泉)と道路を挟んだ小高い丘に位置する。江戸時代に祀られた祠のようなものであるが、ご本尊様は現在、大地の泉に近い平坦な土地に安置されている。現在、ご本尊様が安置されている場所は、元来温泉が出ていた地点であるが、湯量を確保しようとボーリングを行ったところ、温泉の噴出が止まってしまったことを受けて場所が移された(写真赤丸部)。

来年度以降に大地の泉と併せて主軸となる温泉神社の立地や背景などを知ることができ、今後の活動の参考になったと感じる。

写真 5. 温泉神社



写真 6. 温泉神社から見た現在の安置場所



3.2.3. 湯沢温泉の視察

温泉神社のお祭りを復活させるにあたり、町内の他の温泉についての理解を深めるべく、湯沢地区の湯沢温泉を視察した。現在 2 つの宿泊施設が営業している湯沢温泉は、源泉付近に、「元湯湯沢荘」と「湯沢温泉新湯新富館」が並んでおり、お肌がツルツルになるような温泉が評判であるようだ。二瓶氏いわく、温泉は共同管理されており、谷津作行政区の大地の泉よりも厳格に管理されているとのことである。大地の泉と比べて、湯沢温泉は湯量が豊富であり、強く溢れ出す温泉が印象的であった。

写真 7. 湯沢温泉の源泉の様子

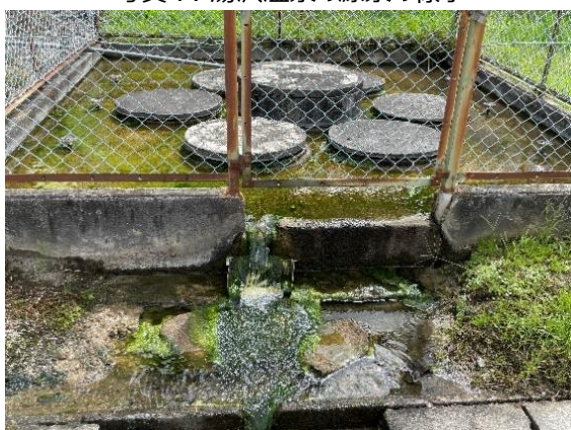


写真 8. 湯沢温泉の周辺を視察するメンバー



3.2.4. 夏井地区（諏訪神社、夏井駅）の視察

谷津作地区の隣に位置する夏井地区では、諏訪神社と JR 磐越東線夏井駅の視察を行った。諏訪神社には国の天然記念物にも指定されている爺杉と媼杉が入り口に並んで立っている。これらは奈良時代から存在する樹齢 1200 年の巨大な杉であり、現在の 2 本の杉の間はわずか 1 メートルほどしかない。これだけの巨木が神社の入り口にそびえたっているのは、非常に壮大であると感じた。視察に行った際にも観光客と思われる人々がおおり、その壮大な景色を写真に収めようとカメラを覗く姿が見られた。神社の駐車場脇には大きな釜があり、そちらも観光客にとっては印象的な観光資源となるような存在感であった。

写真 9. 夏井駅



写真 10. 諏訪神社の爺杉・媼杉



夏井駅はJR磐越東線の小野新町駅からいわき方面へ1駅隣の駅である。夏井駅が含まれる、いわきー小野新町間は2021年度で6億9000万の赤字が生じており、2023年3月には「磐越東線活性化対策協議会」の初会合が開かれるなど、存続に向けた話し合いが進められている⁴。地域住民にとっては重要な交通手段の1つであるため、鉄道は今後も必要であると考えられるが、存続に向けて利用者の促進や存続支援などの様々な課題が挙げられる。駅からは有名な観光資源である「夏井千本桜」が一望できるため、このような他の観光資源との連携もしつつ、利用者増加を促すというような策が今後必要になってくるのではないだろうか。

3.2.5. 「おのまち健康まつり2023」への参加

9月10日(日)に町内の町民体育館及びB and G海洋センターで開催された、「おのまち健康まつり2023」に参加した。外にはフードトラックが並んでおり、室内では健康測定ブースにおいて骨密度等の測定を行ったほか、町内の物産品を扱う物産展において、それぞれの商品に対する思いや商品の説明を伺った。このお祭りは前年度に参加した「小町ふれあいフェスタ」の後継イベントとされている。今年度はその名の通り、健康面に焦点を当てたイベントとなっており、上述した健康測定を行うブースの他、健康食品を紹介するブースなども展開されていた。老若男女を問わずに参加できるようなイベントがいくつもあり、町民の健康のみならず、町民同士の交流も促すことができるような点が特徴的であると感じた。

写真 11. おのまち健康まつり2023の様子



写真 12. おのまち健康祭りにおける物産展



3.2.6. 現地の方との懇談会

9月9日(土)の夜に谷津作行政地区内の谷津作研修センターにて、懇談会を開催した。谷津作研修センターは、地域住民の教養を高め、連帯意識の高揚を図るために設置された施

⁴ 斎藤徹(2023)「磐越東線など福島赤字4路線、存続策は？沿線自治体で協議始まる」『朝日新聞 DIGITAL』(<https://www.asahi.com/articles/ASR3Z6VX0R3YUGTB008.html>)を参照

設である。今回の懇談会では、行政区の方々にこれまでの活動概要を説明するとともに、10月14日(土)の八雲神社例大祭に向けた話し合いに参加させていただいた。普段のオンライン・ミーティングなどでは関わることのない行政区の方々と交流する重要な機会であったため、今年度のメンバーの自己紹介から行い、事業についての説明や例大祭に向けた話し合いを進めた。時間の限られた中での話し合いであったが、地域住民が実際に挙げる課題やそれに向けた解決策の提案など、より具体的なお話をさせていただくことができた。

3.2.7. 八雲神社例大祭（子ども神輿）への参加

10月13日(金)、14日(土)の現地活動では、八雲神社の例大祭(子ども神輿)に参加した。前日13日(金)の夜に現地入りし、翌14日(土)の八雲神社例大祭の神輿の補助などの活動を行った。

図表 9. 行程表

時程	行程
10月13日(金) 17:53～17:58	東武スカイツリーライン(南栗橋行)(5分) 獨協大学前駅発～新越谷駅着
18:12～18:24	JR 武蔵野線(府中本町行)(11分) 南越谷発～南浦和着
18:27～18:39	JR 京浜東北線(大宮行)(13分) 南浦和駅発～大宮駅着
18:53～19:44	東北新幹線 やまびこ 71号(盛岡行)(51分) 大宮駅発～郡山駅着
20:02～20:53	JR 磐越東線(いわき行)(51分) 郡山駅発～小野新町駅着 現地の方の車にて宿泊先へ移動
10月14日(土) 7:00～8:00	宿にて朝食
9:00	八雲神社に準備のために集合
10:30～	祭典開始
12:50～	八雲神社前に帰還、八雲神社前広場の出店で昼食
15:00	八雲神社へ神輿が帰還
15:00～16:30	現地の方との交流
16:42～17:36	現地解散もしくは電車にて移動
18:06～18:36	JR 磐越東線(郡山行)(54分) 小野新町駅発～郡山駅着
18:06～18:36 /19:03/19:28/	東北新幹線 やまびこ 152号(東京行)(30分/57分/82分) 郡山駅発～宇都宮駅/大宮駅/東京駅着 新幹線にて移動後、宇都宮駅・大宮駅・東京駅にて各自解散・帰宅

コロナ禍明けを受けて再開された、八雲神社例大祭(子ども神輿)に参加した。今年は子ども神輿のほか、神楽や模擬店が催され、八雲神社の例大祭は復活した。学生メンバーは、

行政区の子どもが担ぐ神輿の装飾を行った後に祭典に参加し、神輿の補助を行った。子ども神輿が終わった後は、八雲神社まで神輿を運び、片付けも行った。活動開始以来、初めて行政区の行事に参加することができ達成感を感じるとともに、行政区の行事について身をもって理解する機会になったと感じる。

写真 13. 装飾後の神輿



写真 14. 賽銭箱を持つメンバー



写真 15. 神輿の片付け



写真 16. 子ども神輿を補助する様子



写真 17. 子どもとともに太鼓をたたくメンバー



3.2.8. 現地視察の評価と今後の展望

以上の現地活動を総括して評価し、今後の展望を図表 10 にまとめた。

図表 10. 現地活動の評価と今後の展望

評価	展望
<ul style="list-style-type: none"> ・小野町の雰囲気や魅力を実感することができた。 ・オンライン上での学びやデータ上での知識とは違った新しい発見も多くあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の経験をもとに、復活させる温泉神社を谷津作行政区らしいものになるように、アイデアを考える。

<ul style="list-style-type: none"> ・意見交換会やおのまち健康まつり 2023 など現地の方と交流することができた。 ・小野町の温かさを感じることができた。 ・経費計算や交通手段などの事務的な部分でミスが出るなど、メンバー間での情報共有が充分でなかった。 ・実際に現地に行って、お祭りを体験することができた。 ・行政区の行事がどのようなものか理解を深めることができた。 ・子どもが普段は行かない神社に向かう姿を見ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・区長や町長、行政機関などと話し合いの場を設けたい。 ・メンバーそれぞれに役割を割り振り、情報を共有できる環境をつくる。 ・学びだけでなくまちをどうしていきたいか逆算し、まちや地域資源を見ていく必要がある。 ・温泉神社の祭りを復活させるにあたり、今回の視察をもとにアイデアを考える。 ・考えたアイデアを来年度以降に実行に移す。
---	---

3.3. 獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2023～Winter～”における地域振興物産展の開催

2023年12月には獨協大学の獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2023～Winter～”というイベント期間内の企画として本福島県大学生事業に携わる複数チームで合同開催した。大学周辺地域の人、学生、大学職員の方々は福島県の物産に興味津々であった。商品の販売と同時に小野町のパンフレットもお客さんに配布して、全体として課題も残ったものの地域をPRできる機会となった。販売した商品については、図表13を確認されたい。

図表 11. 福島県復興支援物産展の開催概要

実施企画名	獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2023～Winter～”における福島県復興支援物産展の開催
開催日	2021年12月4日(月)～8日(金)の昼休み(11:00～14:00)
開催場所	獨協大学学生センター雄飛ホールの北側の内外
企画概要	<ul style="list-style-type: none"> ・学内において冬季 Earth Week Dokkyo が開催され、「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」は4～7日の4日間、小野町のPRを目的に小野町の特産品を出品した。 ・販売した商品は小野町の特産品である砂糖パン、燻りたくあん、燻製たまご、ぬれ花豆、小町麺(太麺・細麺)、バトンクッキー(えごま・フロマージュ)の計8品である。 ・地域の方からの商品説明をもとにメンバーが商品のポップを作成し、作成したポップを掲示しながら商品を販売した。

写真 18. 販売した商品とポップ



図表 12. 物産展のポスター



図表 13. 福島復興支援物産展の収支

品目	収入(売上)			支出(仕入れ)		
	販売価格	販売数	小計	仕入れ値	仕入れ個数	小計
砂糖パン	¥500	10	¥5,000	¥456	10	¥4,560
燻りたくあん	¥400	5	¥2,000	¥400	5	¥2,000
燻製たまご	¥300	4	¥1,200	¥281	4	¥1,124
ぬれ花豆	¥400	12	¥4,800	¥380	12	¥4,560
小町麺(太麺)	¥130	3	¥390	¥130	3	¥390
小町麺(細麺)	¥130	3	¥390	¥130	3	¥390
バトンクッキー(えごま)	¥120	10	¥1,200	¥120	10	¥1,200
バトンクッキー(フロマージュ)	¥160	10	¥1,600	¥160	10	¥1,600
小計			¥16,580	¥1,790	1	¥1,790

以上の福島復興支援物産展における小野町の PR 活動を総括して評価し、今後の展望を図表 14 にまとめた。

図表 14. 福島復興支援物産展の評価と展望

評価	展望
<ul style="list-style-type: none"> ・学生のお客さんが少なかった。 ・開催までの段取りが悪くスケジュールが急になってしまったことで現地の方々に迷惑をかけてしまった。 ・学生に限らず、大学職員や地域住民の方など多くの人にお越しいただいた。 ・他地域の特産品や野菜などを見ることができ刺激 	<ul style="list-style-type: none"> ・段取りをよくし、都合が合えばぜひ現地の方々に参加して一緒に PR していただきたい。 ・今回の販売数などを考慮して次回以降は見積もりをより正確にする。 ・駅前などで呼び込みをして今回よりもお客さんを増やしたい。

<p>をもらえた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・販売数量は去年の反省を生かし個数を調整できた。 ・地域の方のコメントをもとにポップを作成したことで、購入者側が商品をイメージしやすくなったのではないかと考えられる。 	
--	--

3.4. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会

2月17日(土)に福島県で「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会が行われ「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」は代表の坂口とメンバーの福永、梅橋、高橋が参加した。多くのチームの活動報告を聞き、次年度以降の参考となることもあった。活動報告会後には交流会も行われ、今後も他チームに負けないうくらい頑張ろうと気持ちを入れなおすきっかけにもなった

写真 19. 福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告の様子



4. 活動を通して見えてきた課題

(1) 住民間での交流・つながりの減少

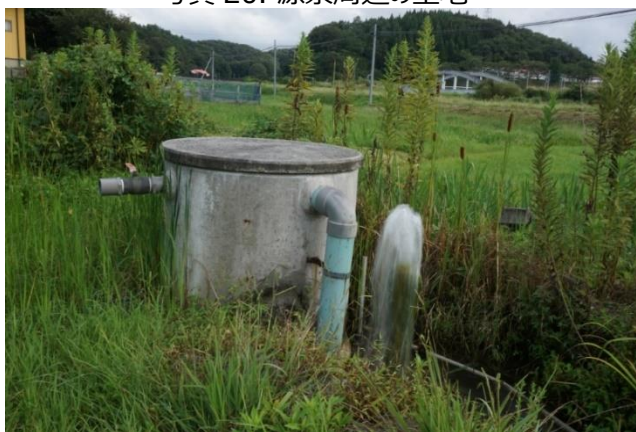
9日夜に谷津作研修センターで谷津作行政区に住む青年層から高齢層までの住民の方々と懇談会をした際に住民間のつながりが希薄になっていることを伺った。特に、地域の子ども会などに加入している子どもが少なくなっており、地域とのつながりが希薄になっている傾向にあることが感じ取れる。地域内には交流機会やコミュニティスペースといった場所は少なくコロナの影響もあったことで近年ではより深刻な状況となっている。昨年度も同じ課題について確認したが、懇談会を受けてこの課題について再確認する形となった。

(2)大地の泉活用に対するさまざまな障壁

現地住民の方の話を見ると源泉である「大地の泉」を活用するためにはさまざまな障壁があることが理解できた。まず地権の問題である。旅館である小町温泉が建っていた当時はこの土地は共有地とされていたが、現在では土地の所有者が存在しており問題は容易ではない。

さらに土地の性質も問題だといえる。この土地は源泉が常に湧き出ている状態であるため土に水分が浸透しぬかるんでいる。かつて旅館が建っていたが現在の制度では建物の建築などは安全上の観点から制限されているようである。写真 20 の通り、源泉の周りには何もなく畑の中にポツンと存在している。そして湧き出た水分を豊富に含んでいる土地のため常にぬかるんでいる。

写真 20. 源泉周辺の土地



(3)若者の担い手不足

懇談会の中では地域のお祭りや運動会などのイベントを取り仕切る若者の存在がないとの声も上がった。有志の方々が集まる谷津作青年団に参加したがない住民もいるという。地域に対する価値や地域貢献する意義を見出せないために参加が進まないのも問題点として挙げられるだろう。

(4)町内の高等学校の統廃合

今年度、小野町唯一の高校である県立小野高校が近隣自治体にある船引高校との統合が決定し数年後には小野町に高校がゼロになってしまうこととなっている。しかし、小野高校は総合学科を導入する高校で姉妹校である沖縄県の高校との交流を盛んに行うほか、部活動やクラブ活動としても大きな成果を残している。地域に根差した活動を行っており小野町にとって欠かせない機関の1つである。

5. 次年度の活動計画～サポート事業への申請に向けて～

5.1. 源泉を活用した温泉神社のお祭りの復活

源泉を活用した温泉神社のお祭りの復活については、本年度7月23日(日)のミーティングで行うことが定まったものである。谷津作行政区において、10/14(土)に開催された八雲神社例大祭のようなイベントを開催することによって、源泉(大地の泉)を活用するとともに、谷津作行政区の住民間のつながりを強固にしたいと考えている。現時点では、大地の泉の湯を利用したプールを行うことや流しそうめんを行うなどのアイデアが出されている。しかし、実際に行うには源泉の衛生面をはじめ様々な障壁が存在する。したがって、具現化に向けて、現地の方との話し合いを重ね、1つひとつ障壁を解消していく必要があると考えられる。

図表 15. 温泉神社の祭りの概要と期待される効果

企画の概要	<ul style="list-style-type: none">・一度幕を閉じた温泉神社のお祭りを学生のアイデアのもと復活させる。・神社の祭典と併せて、大地の泉をいずれかの形で利活用したイベントを開催する。
期待される効果	<ul style="list-style-type: none">・谷津作行政区の魅力を知ってもらう機会の創出。・谷津作行政区に住む住民同士のつながりを強化・大地の泉の利活用。

5.2. 福島県復興支援物産展の継続開催

前年度に引き続き、2023年12月には獨協大学の獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2023 ～Winter～”というイベント期間内の企画として本事業に携わる複数チームで福島県復興支援物産展を合同開催した。この物産展は小野町の特産品を販売することで、大学生や大学スタッフ、獨協大学の周辺住民に小野町について知ってもらうことを目的としている。今年度は、昨年度の活動をもとに販売方法を改善しつつ、小野町の特産品をすべて販売することができた。次年度以降では、広報の方法を改善しながら、より多くの人々に小野町のことを知ってもらうきっかけとなるよう、更に活動を拡大させていきたいと考えている。

5.3. 温泉マルシェの開催

谷津作行政区、そして小野町全体を盛り上げていくためのアプローチ方法としてマルシェを提案したい。ここでは「大地の泉」にちなんで温泉マルシェという形で紹介していく。住民へのヒアリングや意見交換会などから住民の中でも源泉が湧き出ていることを知らない人々が多いようだ。源泉が湧き出ているこの地を知ってもらうことを目的とし全国各地の、温泉にちなんだ商品を販売する。他地域の商品をここで行うことにより少なくとも住民が興味・関心を持ってくれると考えた。隣の田村市瀬川地区で集落復興支援事業を行っ

ているセガワ応援隊は「軽トラマルシェ」を企画・開催し住民から高い評価を得ており、「軽トラマルシェ」というイベントが住民間の交流の拠点となっていた。こうした取り組み事例を参考にしながらまちにあったマルシェの形を模索していきたい。

図表 16. 温泉マルシェの開催の提案

企画の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・源泉が湧き出ている土地や徒歩圏内にある小野新町駅前スペースを使い小規模なマルシェを開催する。 ・地元の特産品、小野高校が商品開発したもの、源泉周辺地域での農産物などと合わせて温泉にちなんだ商品(食品や雑貨)を販売。 ・大地の泉のPR活動も盛り込む。
期待される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民、町外の来場者など幅広い人たちの参加が見込める。 ・地域資源で魅力の1つでもある「大地の泉」について知ってもらうことができ住民全体で源泉を活用した主体的な取り組みへの参加につながる。 ・私たちのチームのメンバーも地域の人と関わり、そして交流をすることで小野町についてもっと知ることができる。 ・住民同士がコミュニケーションをとることができる1つの交流拠点としての機能にも期待ができる。 ・町内外から来場者が集まることで、将来、小町温泉が復活した際に、「行ってみよう」という顧客を増せる。
具体的な企画案	<p>[時期]秋～冬頃 [場所]小野新町駅前スペース [客を呼び込む仕組みづくり]小学生に「マルシェ開催のお知らせ」を家に持ち帰ってもらい、ご家族に広報する。地域の回覧板で広報する。小野町のホームページにアップしてもらう。SNSで発信する。小野新町駅掲示板ならびに郡山駅掲示板での掲示。 [イベント]温泉グルメ試食会の開催など</p>

6. おわりに

今年度は、2度の現地訪問を中心に福島県復興支援物産展の開催など様々な活動を展開してきた。この1年間の活動を振り返ると、源泉活用の基本方針について決めることができ、1歩前進することができたのではないかと感じる。一昨年度(2021年度)は、オンラインの活動が中心であり、現地の方との交流はオンラインでのミーティングに限定されていたが、昨年度(2022年度)は新型コロナウイルス感染症の規制緩和に伴い、現地に訪問し、現地のことへの学びを深める機会になった。そして、今年度(2023年度)は、源泉を活用した温泉神社のお祭りを復活させるという今後の方針について定めた上で、八雲神社の例大祭という地域の伝統行事に参加させていただいた。今までの活動は小野町の観光資源などの視察が中心であったが、今年度は八雲神社の例大祭において地域の方と共に行事に参加させていただくことで、より一層小野町や谷津作行政区への理解を深めることができたと感じる。

最後に、来年度以降に温泉神社の祭りを復活させるという方針を決定した以上、温泉神

社のお祭りの復活に向けて、オンラインでのミーティングを通して、地域住民の意向を踏まえながら、アイデア出しなどを積極的に行っていく必要があると考える。ミーティングを重ねて現地の方の意向を踏まえながら、来年度以降はチーム名にあるように「大地の泉」を活用する温泉神社のお祭りを開催することで、住民同士が「つながる」機会を創造することで、谷津作行政区の活性化に携わっていきたい。

謝辞

今年度は、オンライン・ミーティングの開催や 2 度の現地調査の受け入れをしていただいた。今年度も私たちと関わり、活動するとともに協力していただいた小野町観光協会会長の二瓶晃一さん、小野町谷津作行政区内に居住する齋藤直美さん、小野町地域おこし協力隊の阿井由加子さんをはじめ、地域活性化に尽力されている地域住民の方々には大変お世話になりました。また、本事業において私たちをサポートしていただいた社会システム株式会社、福島県地域振興課の皆様などすべての方にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。